

Hatch!

私たちハッチ、孵化準備OK！



Hatch!

たなべ未来創造塾OBOG会



ともに歩こう。次の1000年へ。

田辺市企画部たなべ営業室

〒646-8545 和歌山県田辺市東山一丁目5番1号

TEL : 0739-33-7714 FAX : 0739-22-5310



熊本大学 研究開発戦略本部
地域連携戦略部門

〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2丁目39番1号

TEL : 096-344-2111 (代表)

カッコいい大人が地域を変える。



1000年の歴史を繋ぎ、 次なる未来を耕すまち



和歌山県南部に位置する田辺市は、近畿最大級の面積を誇る広大な地域です。古くから人々に守られてきた世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」や、日本一の梅産地を支える世界農業遺産「みなべ・田辺の梅システム」を有し、豊かな自然と精神文化が今も人々の暮らしの根底に流れています。

しかし、現在この地も人口減少という大きな課題に直面しています。私たちは、1000年以上続いてきたこの豊かな自然と産業、そして暮らしを次の世代へ繋ぐため、伝統を尊びながらも、自らの手で変化を起こしていく道を選びました。

その挑戦の核となるのが「たなべ未来創造塾」です。産学官金が一体となって塾生を支える独自の体制の下、これまでに数多くの革新的なプロジェクトが誕生してきました。ここは単なる起業支援の場ではありません。地域に深く根を張りながら、修了生たちが「格好いい大人」として自立し、都市部とも繋がる。未来塾は、新たな「好循環」を生み出すエンジンとして機能し続けています。

塾から溢れ出した情熱は、今や市内全域へ、そして全国へと広がりを見せています。一人一人の「やりたい」を地域の「力」に変えていく。田辺市は今、日本を代表する地方創生のモデルとして、力強い歩みを加速させています。

「産学官金」という仕組みから、 地域を動かす「うねり」へ。

世代を超えた「学びの連鎖」
未来塾の精神は、多様な層へと波及しています。高校生が地域の未来を描く「神島塾」や、一步踏み出したい女性や若者を後押しする「プチ起業塾」。これらは、未来塾で培われたノウハウが次世代や新たな挑戦者へと引き継がれている証です。



「姉妹塾」との連携

田辺の熱量は、地域を越えて共鳴しています。志を同じくする全国の「姉妹塾」との交流は、互いの知恵を共有し、ローカルビジネスの可能性を広げるプラットフォームとなっています。このネットワークが、地域単体では解決できない課題を突破する力に変わります。

「関係人口」との共創

「TANABEES」などのプログラムを通じ、都市部の副業人材やクリエイターが「チーム」としてプロジェクトに参画。外からの視点と地元の情熱が混ざり合うことで、持続可能なビジネスモデルがより強固なものへと磨き上げられています。もはや「住んでいるかどうか」という枠を超え、共に未来を創る仲間が全国に広がっています。



たなべ未来創造塾 塾長／田辺市長

真砂 充敏

当事者意識の強さと
期を超えてつながる
行動力が支えてきた

真砂 充敏

1957年、中辺路町生まれ。
2005年の市町村合併に伴う新「田辺市」発足以来、市長として6期連続で市政を担う。
世界遺産「熊野古道」を核とした地域活性化や防災対策を推進。2014年、市役所内に「たなべ営業室」を新設。産官学金連携による若手起業家育成プログラム「たなべ未来創造塾」の塾長を務め、地域課題をビジネスで解決する人材育成に注力している。

たなべ未来創造塾(以下「未来塾」)が、おかげさまで10周年を迎えることができました。塾生・修了生のみなさんをはじめ、これまで未来塾を支えてくださったすべてのみなさんに、心からお礼を申し上げます。

人口減少という田辺市が抱える根本的な課題に向き合い、持続可能な地域をつくるには、地域を担う次の世代の人材が必要です。「成果が出るのはもっと先になるかもしれないが、どこかで取りかかる必要がある」と覚悟のうえで、地域の課題をビジネスで解決することをテーマにこの未来塾を立ち上げました。ところが、1期生・2期生のみなさんが、私の予想をはるかに上回る勢いで動き出してくれました。

その一つが、林業家、家具家、デザイナーなど異業種が集まり、お互いの知識や経験を出し合って一緒に家具をつくる取り組みです。「あかね材(虫食いのある紀州材)」を使ったテーブルはその象徴であり、第一号の製品は市長室に置くことに決めました。今も来客があるとこのテーブルについて説明し、田辺の林業と未来塾等について伝えるきっかけになっています。

私は未来塾によって人材を“育成”したのではなく、“発掘”できたと思っています。それは、地域をもっと元気にしていきたい、自分の事業をもう一歩前に進めたいと思っている人材がこの地域にいて、田辺市の次の10年を見据えて未来塾を創設したタイミングとうまく重なったのではないかと見ています。

この10年の間には、コロナ禍でなかなか顔を合わせられない時期やシティプロモーションアワードの受賞、周辺自治体への未来塾の広域化など、いろいろな出来事が積み重なって今日があります。振り返れば、未来塾が続いてきた一番の理由は、みなさん一人一人が持つ当事者意識の強さと、期を超えてつながり続けた行動力にほかなりません。これからの10年は、地域を超えた関係人口づくりや、ふるさと住民登録制度とも連動した、さらに広がりのある役割が未来塾に求められていくと感じています。世の中が大きく変わろうとしている今、みなさんがそのつなぎ役として活躍してくださることを心から期待しています。

田辺モデルとは、何か

地域は必ず応えてくれる

自ら考え動き出せば



熊本大学教授・副学長／共創学環長

金岡 省吾

ローカルイノベーターの
卵が孵化していく
伴走という10年間

私は2015年に発表された田辺市価値創造戦略ビジョン・戦略プランづくりに携わったことをきっかけに、『たなべ未来創造塾』を田辺市と一緒に立ち上げました。田辺市は和歌山第二の都市で、県南地域から人々が居住地や滞在場所を変える移動(人口流動)や、人材や人口が都市圏外へ流出するのをせき止める役割(ダム機能)を有しています。

この地域構造上の特徴を活かせれば地域が動き出す可能性が高いけれど、あとは“自ら考えて動き出す”ことができるかどうか。人口減少の時代は、それまでの効率性よりも自分たちの存在意義(パーパス)が重要です。未来塾成否は、企業課題と地域課題を徹底的に考え、双方の解決へ自ら動き出し、それを支援することができるかどうかにあります。

未来塾は塾生たちにきっかけを与え、伴走し、孵化・育成(インキュベート)し、そして大きな海で荒波にもまれて帰ってきてーを続けてきました。1期から4期くらいまでは“地域の課題をビジネスで解決

する地域力”が育ち、活躍するカッコいい大人が目立ち始めました。そしてこれに伴って地域への愛着や絆(ソーシャルキャピタル)が高まり、一度は進学や就職で市外・県外に出た若者が地域に戻ってきたり、地域の面白さにひかれた人たちが首都圏から集まってきたりする“新しい人の流れを生み出す力”が生まれました。

今後約10年間の日本の国土づくりの指針(第三次国土形成計画)で示されているこの二つの地域力を田辺では体现し始めています。これがこの10年間に田辺市で見てきた変化だと捉えています。

未来塾はローカルイノベーターの卵を産み、育てるところ。人口減少時代の地域を救うのは、この卵から育ったクールな大人たちの背中です。人口減少に立ち向かい、パーパス経営、CSV(共有価値の創造)経営に挑戦してください!そんな人たちのところには次世代を担う若者が集まり、無敵な企業・地域になっていくと思います。

金岡 省吾

千葉大学大学院修了後、シンクタンクにて国土・地域政策の研究に従事。室蘭工業大学大学院にて博士号を取得。2006年より富山大学、2021年より熊本大学へそれぞれIターン。富山、和歌山(田辺)、熊本(八代・阿蘇・天草等)など各地で、地域課題をビジネスで解決する「CSV創出塾」を展開。産学官金の連携を通じた地域定着教育や人口減少対策に尽力し、多様なステイクホルダーと共に持続可能な地域づくりにコミットしている。



一般社団法人
田辺市熊野ツーリズムビューロー
会長 多田稔子

田辺市商工振興課長
田辺市たなべ営業室参事
熊本大学客員教授
鍋屋安則

(株)たがみ
代表取締役 田上雅人

チャレンジが人を育て、地域をつなぐ

ター育成事業をやっているんですけど、未来塾出身者がたくさんいます。自分たちでレベルアップをやりし、修了した人もどんどん研修を応援に行くし。未来塾の文化を引き継いでいるように思いますね。

——最後に、塾生・修了生・関係者の皆さんへのメッセージをお願いします。

田上 とりあえず一步踏み出すこと。一步出たら、とりあえず右か左か選ばなあかんし、どっちかを選び続けるだけの話なんで。一個一個選ぶ度に成長していったらええと思うんで、とりあえず前を向いて進んでいくことを恐れずにが一番いいことなんかなと思います。

多田 縮小していく社会の流れに沿っていかざるを得ないと思うんですよね。今までこれで成功したから、明日からも同じ方法で成功できるかというそうではない。ゼロからイチを生み出すくらいのエネルギーで挑んで欲しい。そしてこの先もずっと田辺が楽しく、豊かに暮らせるまちであるよう、そんな心意気で頑張ってほしいですね。

鍋屋 チャレンジする人をもっと作っていききたい。そのチャレンジを次の高校生、中学生、そして子どもたちに伝えてもらって、その子たちがまた大きくなって次につなげていく。そうやって人が循環する社会になると、持続可能な地域になっていくと思うので、みんなでそれをつくっていききたい。この田辺のナレッジを全国に広めていけば、日本全体がよくなるのではないかという思いがあります。

—たなべ未来創造塾(以下未来塾)が生まれたきっかけやその時の様子を教えてください。

鍋屋安則(以下鍋屋) 田辺市のプロモーション活動を首都圏で行ったのですが、行政だけが先行していて地域の皆さんがついてきていないと感じたことが出発点です。当時富山大学で教鞭を取っていた金岡省吾先生の「民間主導で地域課題をビジネスで解決することが持続可能な社会につながる」という考えに触れ、自分の人生をかけるぐらいの気持ちで未来塾を立ち上げました。そして、これと一緒に取り組む仲間として真っ先に思ったのが、田上さん、多田さんのお二人。公募と並行して塾生を集めるために50人ほどをリストアップし、一人一人に足を運んで声をかけていきました。

実は田上さんとは、あることで行き違いが生じて大げんかして。その仲直りの場で「次の若い子らがチャレンジできる場所を作っておいて」と言われたことが未来塾につながっています。

田上雅人(以下田上) 僕もある程度の歳になってきたし、若い子でちょっとしたきっかけで加速する人はいくらでもおるんですよ。だから、背中を押せる場をもっと作れたらという気持ちでした。

多田稔子(以下多田) 人口減少という課題に正面からぶつかる未来塾を市役所が立ち上げると聞いて斬新だなと。時間はか

かるだろうけれどすごい成果を生み出すだろうと直感的に思っ、二つ返事で協力しますと伝えました。

—10年間の未来塾の歩みを振り返り、未来塾の印象や、塾生の奮闘ぶりを通じて強く感じられたことなどがありますか。

多田 単に知識を得て夢を語る場ではなくて、思いを形にするためのお金や行政のサポートがこの未来塾にはある。OBがモデルを作ってくれているので、後から入ってくる人たちが「あんな風にするんやね」とそれぞれが実装できる。そこが未来塾の大きな魅力だと思いますね。



OBがモデルを作り
追いかける人たちが
思いを実装できる。



摩擦があるほど
いいものになっていく。
課題はチャンス！

田上 自分の場合は20代の時に、ブランド米を作りたいと思ったことが心の片隅にあったから、思い続けてたらチャンスって絶対でてるんですよ。その時にやるかやらなかだけで。それで商売にしてもイベントにしてもやり続けるというんなことがあって、当然周囲との摩擦も生まれる。でも、それは途中だから失敗でないし、摩擦があった方がええもんになっていく体感ができたり、摩擦に耐えられるようになったりするから、課題はチャンスやなと思いますね。

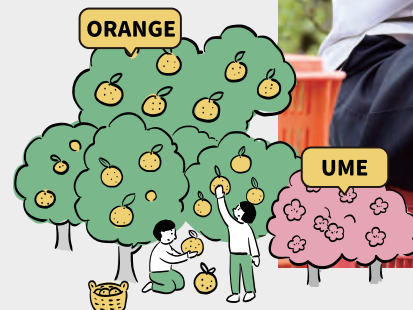
鍋屋 未来塾を立ち上げた時は回すのに必死で。あまりいい運営ができなかったので、楽しい雰囲気づくりを意識して対話を多くしていきました。3期ぐらいからどんどん地域が変わり始めているのを実感しましたね。また、1期から10期まで、毎年ドラマがあるんですよ。仲間同士で課題を解決し合ったり、OBが後輩の伴走してくれたり。ある程度の歳になってから、同じ釜の飯を食べた仲間が十数人もいるって、一生の宝だと思いますね。

多田 横のつながりができて、OBとのつながりもすぐにできる。未来塾を卒業したらそれで終わりではないんですよ。今、田辺市熊野ツーリズムビューローでは森林環境学習のインタープリ



チャレンジする人をもっと作っていききたい。

ひなたの物語



4期生 更井亮介
Caravansarai

1期生 岡本和宜
(株)日向屋

若い人が憧れる農業を

私たちが守る！

私たちの畑は

狩る、解体する、食す

田辺市上芳養日向地区で梅やみかんを栽培する『日向屋』代表の岡本和宜さんは、面白い農業がしたいと未来塾の1期生に。それから10年にわたり、農業・狩猟・加工・販売をつなげた独自のビジネスモデルを築いてきました。その始まりは、農業をするうえで避けられない鳥獣害の問題でした。捕獲後はバットで叩いて穴を掘って埋めるといった方法に「若い人がこんな農業をしたいと思うか」と疑問に感じたからでした。

そして、岡本さんが子どもの頃からよく知り、当時長野県のレストランでジビエを取り扱っていた更井さんの行動によって転機が訪れました。更井さんが帰省中にジビエを調理して岡本さんに届けたのをきっかけに、「ジビエを知る会」を開催。更井さんがジビエの魅力を語りながら料理を提供するこのイベントは、地域に新鮮な驚きをもたらしました。さらに岡本さんは、捕獲から加工・流通まで、地域内で一つにつながる仕組みが整えばこの課題が解決できると思い、ジビエ処理加工所の誘致へ。そのすぐ後に更井さんも上芳養にUターンして、ジビエを料理して広める役割を担うことになりました。

この流れに魅せられた人たちが次々と『日向屋』に加わり始めて農業分野以外からの就農者も増え、梅やみかんの栽培に加えてジュースや梅干しなど20種類以上の加工品を手がけるまでになりました。また、関係人口との関わりも深く、東京を中心に催事などの際には販売を手伝ってくれる人たちが多数いるなど、多方面に好循環をもたらしています。農地も創業時の約2ヘクタールから6ヘクタール以上へと広がり、耕作放棄地の再生も進んでいます。「全国に世界に市場があり、農業のポテンシャルを感じている」と力強く語る岡本さん。新規就農者を増やすことが鳥獣害も耕作放棄地の問題も解決すると確信しながら、地域の魅力を発信し続けます。



上芳養日向地区出身の更井亮介さんは、長野県のレストランでジビエ料理を学んだ後、2018年にUターン。地域活性化拠点『the CUE』でシェフを務めながら未来塾4期生として学び、2020年春に祖父の梅小屋を改装したフレンチレストラン『キャラバンサライ』をオープンしました。しかし間もなくコロナ禍に見舞われましたが、更井さんはすぐに行動開始。酒飯店『堀忠商店』で未来塾1期生の堀将和さんと組んでお酒とペアリングできるオードブルセットの販売や、農繁期の梅農家への弁当宅配を始め、休校中の子どもたちのために給食代わりとなる200円弁当も提供しました。「塾で地域課題について考えたからこそ行動できた」と振り返ります。店ではジビエはもちろん地元野菜を使った料理を供し、『日向屋』のみかんジュースもドリンクメニューに並びます。地域の恵みを料理にして表現し、田辺の魅力を伝える重要な場として根づいています。さらに、スタッフのキャリアを見据えて紀伊田辺駅前にワインバーをオープン。新たな挑戦を続けます。

日向屋からの広がり



The CUEのメンバー

更井さんが『the CUE』でシェフを務めていた頃、運営者の一人である『中村工務店』の中村文雄さん(1期生)から看板メニューの開発を依頼されました。焼きたてのパンズ、シカとイノシシのミンチ肉のパーティ、『はつやま鮮魚店』の初山徹さん(3期生)から仕入れた野菜、自身が開発したソース——地域の関わりが、一つのバーガーに凝縮されました。更井さんが『the CUE』を離れると、「CUEバーガー」もメニューから姿を消しましたが、1年に一度復活。毎年10月、扇ヶ浜で開催される「弁慶祭」に『キャラバンサライ』として出店、ジビエバーガーとして提供しています。「毎年食べに来てくれる方がいます」と更井さん。地域の味として愛され続けています。



岡本さんは耕作放棄地の再生を手がける際、育林業を行う『中川』の中川雅也さんに木の伐採などの仕事を依頼しています。

◀ 2期生 中川雅也
株式会社 中川



◀ 6期生 田中和宏

日向屋を訪れた
「熊野Reborn Project」メンバー

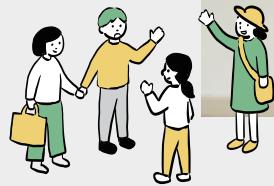


田中和宏さんは、関係人口として通ううちに地域おこし協力隊に就任して田辺市に移住。『日向屋』で3年間働き、その間未来塾(第6期)にも参加しました。関東のIT企業に勤務した経験を生かして在庫管理アプリを自作したり、農林水産省の鳥獣対策優良活動表彰(農林水産大臣賞を受賞)をはじめ様々な賞のエントリーのために書類を作成したりと活躍。田辺市在住時には関係人口の受け皿となり、首都圏から訪れる人と田辺の人をつなぐ役割も。



1期生
竹林陽子
ColoGraphical

『design office COLOGRAPHICAL』の竹林陽子さんは、岡本さんから名刺のデザインを依頼されたことを機に、現在では『日向屋』のあらゆる商品やウェブサイトのデザインを担当。



5期生 小山葵
株式会社onlyone benefit

3期生 高橋あいか
リトミック&知育教室リトスタnico



10期 濱田早苗
Kafuu



子育て世代を応援

塾の仲間と連携して、

「もいもい」から、子育ての安心を広げたい

地域密着のファイナンシャルプランナー（FP）として住宅・ライフプラン相談を専門とする小山葵さん（5期生）には、ある違和感がありました。相談に訪れる子育て世代の親が話に集中できず、さらには子どもが騒ぐと恐縮する——「安心して相談できる場所をつくりたい」という思いが強まりました。田辺市内で子どもの一時預かりが難しい状況だと知り、2024年3月に小山さん自ら一時預かり専門託児所「もいもい」を立ち上げ。認可外施設の運営を維持するのは簡単ではありませんが、「利用者に喜ばれている」と話します。

利用者を待つだけでは認知度は上がらないと判断した小山さんは、昨年7月に託児付きイベント「ファミリーフェスタ」を開催。インテリアコーディネーターの鈴木裕美子さん（9期）に会場レイアウトを、濱田早苗さん（10期）にInstagram集客を依頼し、大盛況となりました。しかし「対象を幅広いファミリー層にしたことで、自分の事業のターゲットにはなかなか届かなかった」という反省も生まれたため、託児所でのイベントでもつながりがあった高橋あいかさん（3期生）とターゲットをより絞り込んだ内容で開催することに。そして昨年11月、未就学児とその親を対象にした知育イベントを実施し、「大きな手応えを感じた」と小山さんも高橋さんもそれぞれの事業へつなげる結果を生み出すことができました。

二人をはじめ自身の事業の課題と地域課題の解決に向かって行動を起こせるのは、未来塾で育んだ仲間とのつながりがあるから。「塾が修了してからが本当の試行錯誤。でも塾に入っていなかったら知り得なかった方々とのつながりにも、市からの協力にもありがたさを感じています」と小山さん。今後は事務所と託児所を一つの拠点に集約して、子育て世代が集う場としてさらなる展開を目指します。子育てコミュニティを中心に塾生たちが連携していく取り組みはこれからも広がりを見せていきそうです。



8期生 花村あゆみ
(同)志成 まごころサポート田辺くるむ店

誰もが
安心して暮らせる
地域を目指して

ジョーバーFOODは、山田かな子さん（7期生）が田辺市と取り組む関係人口創出プログラム「TANABEES」によって磨き上げられ、オープンしました。準備段階から都市圏の副業人材らが「チーム・ジョーバー」として参画。現場での試食や対話を通じて、高齢者が生き生きと働ける環境や事業継続の仕組みを花村さんと共に築いてきました。外部人材の視点やスキルが花村さんの情熱と重なり、強固な土台が完成しました。



7期生
山田かな子
(株)TODAY



坪井直子さん（4期生）は、地域の人口減少が進んで子どもの数が減れば、家業であるスポーツ用品店『ツボ井』の売り上げに直結すると実感しました。そこで未来塾の同期でスポーツトレーナーの北川雄一さんに声をかけ、1階の売り場で体操教室を開催したところ大きな反響がありました。需要を確信した坪井さんは2階の倉庫を改装してスタジオを整備。現在は高橋あいかさん（3期生）のリトミック教室のほか、ヨガやピラティスのレッスンに活用されています。2歳の子どもを持つ坪井さんは「店舗に足を運ぶきっかけにもなれば」と、子育て世代の交流拠点や特技のある母親たちの活躍の場としてマルシェの開催なども構想しています。



子どもたちに
スポーツの機会を

4期生 坪井直子
(有)ツボ井

クラフトビアバルとゲストハウスを営む『Nagi』の坪井慶太さん（10期生）は、妻・直子さんの勧めで起業と同時に未来塾へ。「地域で店を営む意義と考え方の土台が得られた」と話します。塾生同士は共通認識があり、連携の話も早いそう。



10期生 坪井慶太
クラフトビアバルNagi

『ヒロメラボ』代表であり、田辺市の新庄漁業協同組合に所属する山西秀明さんは、ヒロメ（海藻）の養殖・販売に加えて、海中環境調査、インタープリターとしての環境教育などを行っています。環境省の「令和の里海作りモデル事業」に新庄漁協での取り組みが採択され、企業と連携して自然共生サイトの認定も取得。漁業体験や保全体験で収益化を図り、観光と漁業を持続可能にする仕組みを構築中です。「関係者とスムーズに連携できたのは未来塾のおかげ。自然があるからこそ生活・社会環境が、さらに経済活動が成り立ち、自然と共にあるこの地域の価値を伝えていきたい」と山西さん。



6期生 山西秀明
ヒロメラボ

観光も、海産物も、
里海が育んでこそ



田植えを
体感してもらい
自分ごとに

7期生 金哲弘
株式会社 山里舎

企業研修やゲストハウス運営と並行しながら、熊野本宮大社の旧社地「大斎原」を囲む水田を守ろうと、『山里舎』代表の金哲弘さんは「大斎原の景観を守るプロジェクト」を行っています。高齢化で耕作が難しくなってきた田んぼを個人・企業のサポーターとともに維持し、現在は約3反を耕作。移住4家族や地域住民、関係人口も含めて年間延べ150人が参加するまでに。「未来塾での学びが地域課題への気づきを深めて、このプロジェクトの原点になった」と金さん。この地域を“故郷”と慕う人たちの力を借りながら自然を守り、社会課題の解決に取り組んでいきます。



工務店の枠を超えて地域課題に向き合い、新築・リフォームから介護、発達支援まで地域住民が一生涯関わり続けられるよう多角的に事業を広げてきた『高垣工務店』。代表の石山登啓さんは未来塾を経て、会社の倉庫をコミュニティスペース「シリコンバー」に改装しました。平等な関係性での対話のルールや使用する“敷居の低さ”が素敵な勘違いを生み、唯一無二の場所に。現在では年間50～60回も利用されており、地元住民はもとより県外や海外有名大学からの見学者も集うようになりました。「ここはいわば関係案内所です」と石山さんが話すように、人と人をつなぐ場として地域に根づいています。



2期生 石山登啓
(株)高垣工務店

素敵な勘違いを
発表するステージ、
シリコンバー



地域の人たちとの
コミュニケーションを
大切にする、
みんなのたまり場

9期生 田中裕子
寒川紙店

祖父母が立ち上げた文房具店に勤める田中裕子さんは地域の課題に向き合い、空き家となった祖父母宅の活用や、盆踊りや子どもの遊び声が消えた地域のにぎわい回復が必要だと強く感じました。そして、「家でも学校でもない、第三の家が必要だと思いました」。空き家の片付けや畑の整地を未来塾の同期生たちが手伝って使用できる状態にし、ここで文房具店の在庫品を活用した工作教室や子ども向けの縁日、クリスマス会を開催。たくさんの笑顔に後押しされて、2026年3月に「みんなのたまり場」を本格スタートさせました。多世代が自然と交流できる場へこれから育てていきます。



さらに次の10年へ！

たなべ未来創造塾では第8期を担当させていただくとともに、第10期までの3年間、塾の運営に携わらせていただきました。この間、「自分たちの地域を自分たちでより良い地域に変える」という熱い想いを持ち、それぞれの事業を通して地域課題解決に取り組む修了生の皆さんの姿を間近で拝見し、私自身も多くのことを学ばせていただきました。

「たなべ未来創造塾」をさらに次の10年へとつなぐため、修了生の皆さんはもとよりこれから塾生になられる皆さんの力で、この素晴らしい取組をより一層盛り上げていただきたいと思います。

8期生担当



田辺市
たなべ営業室
係長 入口直史

カッコイイ大人の伴走者として

9期・10期生の皆様への伴走支援を通じて、ビジネスを生み出す苦しみと、それを形にしていける創造の喜びを間近で拝見し、私自身も貴重な経験をさせていただきました。

支援を続ける中で、挑戦続ける塾生の皆様の姿こそが「カッコイイ大人」の体現であると改めて強く感じています。

修了後はそれぞれの道を歩まれると思いますが、OB・OG会を中心に繋がりを持ち続け、連携を深めることで、地域にポジティブな変化を起こし続けてくださることを心より願っております。

9期生
10期生担当



田辺市
たなべ営業室
主査 石野善之

10年間未来塾を見つめてきた

喜田記者の 取材NOTE

自身も未来塾1期生である、紀伊民報記者の喜田義人さん。これまでに印象に残った取材や取材にかける思いを振り返りました。



喜田記者の取材ポイント！



- ☐ パソコンは使わず、メモを取る。
最近はメモを取らずに記憶で記事を書けるように。
- ☐ オンラインではなく、現地に足を運ぶ。
面白い話は、本題の外側にあることも。
- ☐ 迎合でも、批判でもなく。
良い方向を向くきっかけを作りたい。

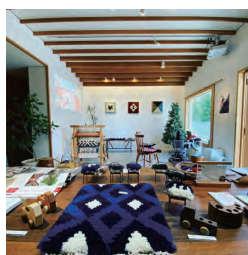


1 有事で連携力・行動力が爆発

やはりコロナ禍のことは忘れられないですね。飲食店や酒販店関係の塾生たちが、あの大変な時期に連携して力を合わせて新しいことを始めた様子取材しました。お酒とオードブルをセットにして届けるサービスをやったり、南紀白浜空港の一角を借りてお弁当やデザートを販売したり。また、キッチンカーで病院前などに出店した人もいましたよね。お客さんが来られないなら自分たちで売りに行く、という発想と行動力がすごかった。あのころからこの辺でキッチンカーが増えましたよね。塾で築いたつながりがいざというときに動く力になるすごさを、取材しながら実感しました。

2 新たな分野の取材が増えた

未来塾取材を続けてきたことで、1期以降の塾生たちとのつながりが広がり、アート関係の取材も増えました。もともと美術館に行くのは好きでしたが、アーティストを取材するという経験はそれほど多くありませんでした。でも、塾で知り合ったギャラリーのオーナーと親しくなってから足を運ぶ機会が増えて、そこで地域のアーティストたちとも出会いました。私が書きたいのは、個展のお知らせにとどまらない記事。人物を取材するのが好きなので、この作品はどうやって生まれたのか、どんな思いでギャラリーを運営しているのかを掘り下げたいと取り組んでいます。取材や記事をきっかけに、作品を見る方も発表する方も、ギャラリーへの敷居が少し下がってくれたら嬉しいですね。

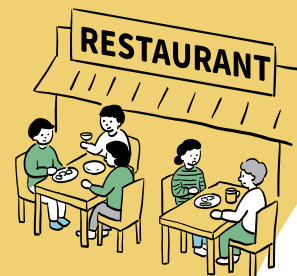


3 この地域をよくしたい思い

人口減少は確かに課題ですが、全国各地で同じ対策をやったら結局人の取り合いになるだけではないかと思っています。この地域にはこの地域なりの豊かさがあるはずで、そういう視点で記事を描けたらと思っています。私は記者ですが、同時にここに暮らす住民でもあります。地域をよくしたいという気持ちは、取材する側もされる側も変わりません。皆さんが取り組んでいることが表に出ないことで、なかったことにしたくない。記事をきっかけに物事がいい方向に動いたとき、この仕事をやっていてよかったと一番感じますね。

次の10年へ、そして未来へ

Hatch!



10周年という大きな節目に、
私たちOB・OG会「Hatch!」は新たな決意とともに、次なるステージへと踏み出します。

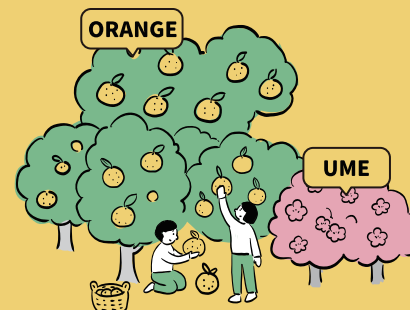


「Hatch!」には、インキュベーション(孵化)への強い思いが込められています。塾生という「卵」が、誰かに割ってもらうのを待つのではなく、自ら内側から殻を突き破り、新しいプロジェクトとして産声を上げる。その「孵化」の瞬間こそが、地域に真の変化をもたらす原動力になると信じているからです。

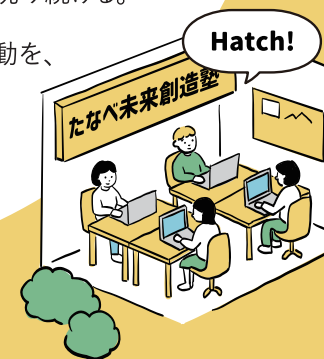
この10年、私たちは「たなべ未来創造塾」という場所で、志を共にする最高の仲間に出会いました。塾を修了してからが本当の試行錯誤の始まりであり、「Hatch!」はその挑戦を一人で抱え込まず、仲間と支え合いながら実践し続けるための場です。このつながりがあれば、一人では越えられなかった壁も必ず突破できると確信しています。

次の10年に向け、私たちは今を生きる責任世代として、自ら卵を孵化させていきます。個々の情熱を連携させ、子どもたちや孫たちへより豊かで暮らしやすい地域をつないでいくために、変わり続け、挑み続ける。

いま、ここから。田辺から地域の未来を創る行動を、
ここに宣言します。



COMMUNITY



<発行日> 2026年5月30日

<発行> 和歌山県田辺市
<企画> たなべ未来創造塾OBOG会「Hatch!」
<ライティング> 久保田真理
<写真> 永井克
<デザイン・イラスト> 竹林陽子(一期生)